【研究ノート】デフリンピック大会をめぐる課題

小倉和夫

はじめに

2025年に予定されているデフリンピック東京大会の準備，運営にあたって，競技場の整備や外国人選手の受け入れ対策等と並んで，参加する日本人選手ならびに関係者の立場に立つとき，対処すべきいかなる課題が存在するかを，あらためて点検しておく必要があろう。その一助として，過去のデフリンピック大会のうち，2009年台北（台湾）第21回大会，2013年ソフィア（ブルガリア）第22回大会，2017年サムスン（トルコ）第23回大会の三つの夏季大会に加え，2015年ハンティ・マンシースク（ロシア）第18回大会，2019年ヴェルテッリーナ（イタリア）第19回大会の二つの冬季大会についての選手団報告書から抽出した課題及び問題点を以下に整理してみた。

選手団報告書には，各大会前の段階における活動あるいは準備における問題点（たとえば，選手選考のタイミングや代表団結団式のやりかたの問題など）も若干散見されるが，ここでは，大会に参加した選手，コーチ，スタッフなどが，現場から感じ取った課題，問題点を抽出した。

1．食事と体調管理

選手が直面した問題点のうち，指摘頻度の高いものに，現地の食事の問題がある。台湾のように日本と似た環境と思われる場所でも，「滞在期間の食事にもう少し気を配るべきだった」[1]「手話通訳まで食事の買いだしの手伝いをしなければならなかった」[2]などの指摘がみられるのは，選手が選手村ないし周辺の食事あるいは手持ちの食材だけでは十分に満足できなかったことを示唆している。また，食習慣の違うブルガリアのソフィア大会では，「日本食のシェフの同行が望まれた」[3]「健康管理を考えた食事がとれなかった」[4]「環境に慣れるまで時間がかかった」[5]「食欲がでる食事ではなかった」[6]といったコメントが目立った。他方，トルコのサムスン大会では，それほど食事について

の問題の指摘が多くなかった。その理由については，日本ろうあ連盟によるヒアリングの結果として，次のような記述があることも関連していると考えられる。すなわち，「選手村に宿泊した選手・役員に朝６時から夜12時までの間，無料の食事サービスが提供」され，それに加えて，選手，スタッフ，ボランティア用に「ランチボックスが配布」されたことである[7]。

食事とも関連して，選手の中には，現地での体調管理に問題があったとの指摘が少なくない。「体調管理不足」[8]「現地でお腹を壊す選手が多くでた」[9]「入国後腹痛を訴えるなど体調を壊した選手が出た」[10]「発熱」[11]などの指摘が結構目立ったことは，選手自身の体調管理に問題があったことを示唆している。

体調管理の一環としてけがの問題がある。けが人が出た競技は，陸上競技[12]，水泳[13]，バスケットボール[14]，サッカー[15]，柔道[16]，テニス[17]，バレーボール[18]，卓球[19]，オリエンテーリング[20]など広範囲におよんでおり，競技不参加や出場取り消しなどの事態をまねいたこともあり，練習や試合中のみならず日常における自己管理及び周囲による配慮の必要性を浮き彫りにしている。

２．通訳とコミュニケーションの問題

デフリンピックではろう者[21]同士，あるいはろう者と健聴者との間のコミュニケーションのとりかたに問題が生じやすい。監督，コーチ，選手同士のコミュニーションの問題は，競技成績にも影響を与えやすい。とりわけチーム競技ではこの点が重要であり，たとえば，台北大会のバスケット競技についてこの点の指摘があった[22]。また，この問題はチーム競技のみならず，バドミントン競技シングルスを含む個人競技においてもみられた[23]。こうした，コミュニケーションの問題は，選手間や選手と監督との間だけではなく，審判，医師などとの間，あるいは大会組織委員会による説明においても生ずることがある[24]。また，PR 活動の一環として競技場外のマスコミ関係者などとの接触の際には，手話通訳，音声通訳などが三重四重に介在されることがあり[25]，そうした状況への対処をあらかじめ考えておく必要がある。

なお，審判や選手同士のコミュニケーションの問題がいかに試合結果に影響するかの点について，ソフィア大会のバスケットボール女子チームのヘッドコーチによる以下のような指摘は，傾聴に値しよう。

> 審判のコールについて，デフバスケットボールは敵味方の声など，音声による情報が遮断されるため，背後など死角での接触がどうしても多くなります。死角で

の接触に対するコールが多くなったことで，審判自身の心理面において，疑わしい場面では笛を吹きやすい雰囲気が全体にありました。そして近代バスケットボールはパワープレーが重要視されてきており，オフェンスに有利なルールとなっているため，ディフェンス側は対応策としてファウル数を計算しながらあえてファウルをする状況も生まれています。審判はゲームをコントロールするため，被ファウル側が不利になるコールはしないなどの対応をしており，今回は言語の壁（健聴者，ろう者：手話，音声英語，音声ブルガリア語など）によってその対応にばらつきが生じてしまっていたと推測されます。さらに接触転倒については，日本国内ならばチャージングを取る場面でも，デフリンピック期間中においては，転倒の原因となった動作がオフェンス側にあるのかディフェンス側にあるのかが体格差によって隠されてしまい，故意による接触なのか，そうでないのかが判断しづらかったため，総じて日本は審判のコールに対して不利でした。我々は，今までの国際大会の経験から「審判のコールに必要以上に神経質にならない」よう，選手に周知し，納得のいかないコールに対しても冷静にアジャストするよう求めてきましたが，今後も国際大会においては，被ファウルについても含め，国際試合における審判へのアジャストも強化のテーマとして重要になってくると考えられます[26]。

ちなみに，我が国において，監督，コーチなどのデフリンピック関連指導スタッフに占めるろう者の割合は約２割と言われる[27]。

デフリンピックにおけるコミュニケーションの問題は，手話通訳者に関連するものも多い。手話通訳者の数の不足の他[28]，しばしば指摘される点として，業務分担の問題がある。すなわち，手話通訳者が，通訳業務以外に食料の調達，英訳業務の手伝い，連絡事務などを引き受けることの当否とその程度，態様の問題である[29]。この問題は，手話通訳者が通訳以外の仕事をするのはあくまでボランテイア活動であるとみなすか，あるいは，そもそも手話通訳者は，通訳であると同時に大会業務のため派遣されたスタッフの一員であると認識すべきかという問題でもあるといえる[30]。この点に関連して，ある手話通訳者は次のような指摘を行っている[31]。

職務は手話通訳ですが，（以下の業務に従事したことに見られるように）チームスタッフとしての役割比重が大きかったように感じます。

○手話通訳としてのコミュニケーション保障

・チーム内（練習，試合，ミーティング）
・その他（他競技選手スタッフ，旅行会社，於成田空港）
・報道関係インタビュー

〇チームスタッフとして
・メディカルスタッフとの連携
・本部との連携
・補食の調達
・練習時の球拾い
・TD 会議出席

この問題は，また，手話通訳者にどこまでの専門性を要求するかの点とも関連している。ある通訳者は，次のように，人材育成の必要性を強調しているが，そうした方向をとるためには，通訳業務と他の業務とのきっちりとした仕分けがなされねばならないであろう。

> やはり専門性を持った通訳者の育成が課題だと思います。デフスポーツにおける通訳者には，手話通訳の技術の他にも，競技に関する知識，長期の帯同に耐えうる体力，選手のメンタルに寄り添える人間力など幅広い力が求められます。今回はチームに国際手話ができる選手がいたので助けられましたが，競技に集中してもらうためには，やはり英語や国際手話が堪能なスタッフも必要です[32]。

この点とも関連して，各競技団体が派遣する通沢と，本部が派遣する通訳との業務分担が必ずしも明確ではないとの指摘にも留意すべきである[33]。

他方，通訳者の仕事が円滑に行われるよう，器具の整備も必要であろう。すなわち，手話通訳者がハンズフリーになるように，携帯電話用のイヤホンを提供することや[34]，本部や外部との連絡には，人によっては音声変換ソフトを活用すること等が考えられる。

なお，手話通訳者については，試合中の通訳者の居場所についてのルールが統一されていないことによる不便を指摘する声も挙がっている[35]。

手話通訳の問題にかぎらず，デフリンピックにおいては，開催地の母国語，英語，日本語，開催地の手話，国際手話，日本手話の間の通訳といった複雑な状況を呈することが当然予想されるが，実際の例として，次のようなケースが報告されている。

男子200mで山田真樹選手が，金メダルを獲得した際，トルコのテレビ局の方が山田真樹選手のお父様にインタビューをしたいという申し出がありました。その際，トルコ語（トルコテレビの方）→国際手話（トルコ人スタッフ）→日本手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→音声通訳（三坂）→山田父。日本語（山田父）→日本手話（三坂）→国際手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→トルコ語（トルコ人スタッフ）→トルコテレビ，という流れで，通訳をさせていただきました。この経験は大変貴重なものでした。それと同時に簡単な挨拶だけではなく，今後は国際手話も覚えていきたいと思うようになりました。

大きなトラブルはなかったものの，選手にとって大会に集中でき，不快感のない良い環境作りができたのか，もっとできた事があったのではないかと反省が残ります[36]。

なお，サムスン大会において，手話通訳に関連して次のような特別の配慮がなされたことが報告されている。すなわち，「日本選手団が利用したトルコ航空には，手話言語ができる客室乗務員が搭乗し，手話による機内ビデオも用意されていた」こと，そして，大会出場には「テレビ電話システムを用いて国際手話通訳と24時間いつでもやりとりができる仕組み」が設けられていたことである[37]。

3．体力，精神力，練習の量と態様

選手一人ひとりが，自らの競技能力，成績に関連して反省あるいは問題点を指摘した事柄を大別すると，体力，精神力，練習の量と態様の三つに分けることかできる。

（1）体力

競技によっては，外国人選手との体格の違いとそれを克服する必要についての言及があるものも稀ではないが，選手個人の努力との関連では，基本的な体力不足を指摘する者が多い[38]。この点は冬季競技においても見られ，体幹強化，スタミナ不足克服といった指摘が見られる[39]。

体力に関連して，競技によっては，ろう者にどのような体力強化が望まれるのか，それはまたなぜかといった点について具体的指摘が行われている例もある。あるデフバレーのトレーナーは以下のように改善すべき点を挙げており，こうした分析は，他の競技においても参考となろう。

・前後左右方向の切り返し能力
・上半身，特にパスを遠くに飛ばす力が重要
この二つが今後の課題として残る。

一つ目として，前後左右の方向の切り返し能力は健聴者選手でも問題となるポイントではあるが，ボールの落下地点に入る速度も遅い，予知する速度も遅いと感じる。また，ワンプレーが終了してから，次のプレーに入るまでにも時間がかかる。これらは全て，全方向の切り返し能力の低さにあると思う。ブロックにおいても，その場でまっすぐ飛ぶ能力にもつながって来ると思う。

二つ目として，上半身特に腕の力でボールを遠くに飛ばす能力に欠けている。これは，腕の力が弱いという事である。基礎スキルの習得が，未熟であるという事もあるが，基礎スキルというよりもこの場面においては体力の要素が大きいと感じる。トレーニング経験が浅いなどの様々な要因があると思うが，あくまで体力はプレーを行う上での基礎であって，それ以上でも以下でもない[40]。

（2）精神面

選手団報告書において指摘された課題のうち，広く見られるものに精神面の問題（通常メンタルな問題といわれるもの）がある。「メンタル面の弱さ」「ハングリー精神の欠如」といった表現での問題指摘は，とりわけ，監督，コーチ，マネージャーなどのコメントに多い[41]。

しかし，選手による「反省点」の指摘においても，次のような形でかなり頻繁に表れている。すなわち「緊張し過ぎ」[42]「力みすぎ」[43]，国を代表していることから来る重圧[44]，一般的な「戦闘心」や「タフさ」の欠如などがあり[45]，またこうした点は冬季大会でも指摘されている[46]。

ただ注意すべきは，同じ「メンタルの問題」といっても，全く逆の指摘もみられることである。とりわけ，国を代表することから来るプレッシャーについては，代表としての意識が足りず，頑張りがないというコメントもあれば，国の代表という重圧に耐えられなかったといった指摘もある[47]。この点は，競技別（個人競技か団体競技かなど），選手個人の性格による違いもあろうが，一般的傾向がどちらであるかは，よく見極めなければならない点であろう。

また，選手によっては，大会中の精神面のケアよりも，むしろ，結果からくる心理的感情をいつまでも残さず，気持ちを切り替えることが大事であるとの指摘もあり[48]，大

会あるいは競技中の精神面の強化の結果，逆に成績不振による精神的打撃が大きく，後に響くといった点をどう考えるかの問題もある。もっとも，デフリンピックの場合は，世間の注目度もいまだ高いとはいえず，選手のスター化も進んでいないので，全体としては，精神面の「弱さ」の克服が課題であるといえるのではあるまいか。

以上に関連して，サムスン大会の陸上部門のコーチが次のように報告している。

> 選手が順位，記録，メダルなどの結果的な要素を試合中に意識しているケースに良かった試合はありません。
>
> 好記録を残した試合を振り返ると順位や記録への意識はなく，気づけば相手選手がいなくなっていた，気づけば自己ベストだった，というような，パフォーマンスを発揮する事に集中するあまり，競技を終えて初めてコンディションの良さに気づくといった思考と行動が大切なのです。今回の試合で不振で終わってしまった２人の選手とメダルを獲得した選手の差はここにあったと思っています[49]。

なお，精神面の問題は，選手のみならず，たとえば，手話通訳者からも，自身の活動に関連して指摘があることに留意せねばならない[50]。

（３）練習の程度と態様

個人の立場から，練習不足を成績不振の原因の一つに挙げる例もあるが[51]，むしろ練習の「態様」についての課題提起が多く見られる。そのうち，合宿の頻度や充実の一環として，健聴者と一緒に行う練習の必要性を説く声もある[52]。また，日本の各地に散らばる代表選手の合同練習を希望する意見がある一方[53]，代表選手だけが集まって練習しても，技能向上にさほど役立たないとの意見もあり[54]，そのタイミングや態様への考慮が必要であろう。

なお，普段の練習，とりわけ合宿や遠征について，これが勤務と重なった場合には，勤務先から特別休暇など通常と違った優遇が受けられる可能性は３割程度に過ぎず，有給休暇を利用する選手は76.2％にも上る[55]。

４．金銭的問題

金銭的問題については，個人負担の重荷，スポンサーの問題，賞金の有無などがしばしば提起されている。

個人負担の問題については，多くの選手，関係者によって指摘されている。一般的な問題提起のほか[56]，具体的な個人負担の費用項目への言及もある。たとえば，合宿費の負担[57]，渡航費[58]，国際大会への参加費[59]などが挙げられている。選手候補も含め，デフスポーツ選手151名へのアンケート調査（2009年）によれば，合宿費や遠征費用については８割が自己負担となっており，年間の自己負担費用が50万円を超える者は，回答した者のうちの約４割に上っていると言われる[60]。

この問題は，選手の参加辞退にも波及する深刻な問題であるとの指摘（たとえば，陸上競技の選手から「メダル獲得射程内でも，経済的状況により辞退する選手も何人かいた」との指摘）もある[61]。また，ビーチバレーの監督は，「出場できたとしても全額自己負担というのは決定事項であり，費用の工面や会社への休暇申請など，非常に行動しにくい状況が長く続きました」と記している[62]。

個人負担の問題の影響は選手のみならず，コーチなどにも及んでおり，陸上競技のコーチは次のような苦境を述べている。

> ８年ぶりのコーチでしたが，ギリギリまで投てきコーチがいなかった点に疑問を感じました。三枝監督とは年賀状やメールなどで進絡はとりあっていたものの，大会が迫った中で私に依頼があったことを考えると，コーチがなぜ決まらなかったのかと感じました。投てきがある程度でき，手話もできる人物が本当にいないのだろうか。そういう人物は存在するとは思うが何故決まらなかったのか，それは『お金』の問題であるかと思います。大会前に返ってくるともわからない30万円近くの大金をなぜコーチが支払う必要があるのでしょうか。この状態は普通ではありません。このことがコーチ就任を足踏みさせる原因なのだと思います。大会前の合同合宿の往復の旅費においても，連盟などが事前に資金を準備したり，合宿中に返金するなどの措置が必要です。選手にしても同じ事が言えると思います。日本代表レベルの選手達がなぜ50万円近くのお金を払って出場しなければならないのか甚だ疑問です。資金面を連盟や国がしっかりと管理し，免除する方向に持って行かない限り，今後は選手ほかコーチを快く引き受ける者はいなくなると思われます[63]。

こうした状況の解決策としては，競技関係団体の努力，スポンサーの獲得などへの言及もみられるが，特定の解決策として，派遣費用の自己負担のありかたにつき，「メダルが獲得可能なレベルの者は自己負担なし，８位入賞以上のレベルの者は半額自己負担，人賞が厳しいレベルの者は全額自己負担といったかたちでの制度を整えるべき」と

の意見も出ている[64]。

他方，資金獲得への様々な努力や取り組みは，単に金銭的な自己負担の軽減の為のみならず，その過程を通じて，競技の知名度の向上や選手の意識の向上に役立つとの趣旨の以下の指摘は傾聴すべきであろう。

> 特に頭を悩ませたのは，資金面での対応です。数少ない資金＋世界選手権の派遣費用やデフリンピックの派遣費用の準備について，日々の合宿計画をしながら，「選手達の負担が少なくなる方法を模索すること」が今思えば，私にとっての大きな課題だったのではないかと今となって思います。また学校や企業への訪問，ポスター・チラシ制作（デザイナー依頼，発注，発送…）など，様々な業務に取り組み，私自身が選手時代にすごく疑問に感じていた広報分野にも取り組み，一定の成果を得た手応えを感じています。実際に，一般の方々の目に触れるところに貼らせていただいたり，寄付金をいただいたり，見学や興味を持ってもらえることが増えました。その結果，選手たちが日本代表という誇り，プライド，憧れの対象となることができたのではと思います[65]。

他方，選手やスタッフで自己負担はじめ金銭的問題を云々しすぎる者は，むしろ放置し，チームから自然と脱落させることによって，チーム全体の士気を高めることに活用したとする次のコメントは，（資金面の困難の程度，態様にもよるが）困難の克服の過程に意味があるという障がい者スポーツ特有の価値観と関連しているとみることもできよう。

> 特にスタッフに関しては「フォア　ザ　チーム」「フォア　ザ　選手」で献身的な活動を深く要求しました。前述したように資金面の厳しさや諸事情から，満足に謝礼も払えず，ほとんど善意にゆだねるような状況が続いたことから，名誉欲や金銭的な要求の高い人，規律や指揮系統に関する理解力，協調性のない人間とは結局，袂を分かつ結果となりました。これはシビアで厳しい合宿を行ったことによる成果であり，副産物であり，残ったスタッフや新たに登用した臨時も含めたスタッフにもいい意味での緊張感や，チームに欠けているところを埋めていこうとする積極性と一体感が生まれていきました。予算の少なさから，満足にウェアを支給もできず，いわゆる日本代表なら当然与えられるものという意識とはかけ離れた強化体制で臨まざるを得なかったことを逆手にとり，結束を図っていくことができました。残ったスタッフたちや苦労した選手

たちには感謝の言葉以外ありません。最大限の賛辞を贈りたいと思います[66]。

金銭的あるいは財政的問題の一環として，スポンサーの獲得の問題がある。この問題については，一般論としての重要性を指摘したものの他[67]，より具体的な改善ポイントに言及した意見もある。たとえば，ある陸上競技選手は，「日本選手団名簿には都道府県の協会しか記載されていませんが，職場の同僚の支援のおかげで出場している以上，恩返しという意味で会社名や学校名も記載してほしいです」という意見を述べているが[68]，こうした点はスポンサーとの関係でも配慮できる点であろう。

また，報奨金の問題も存在する。諸外国と比べて日本では報奨金がほとんど出ないことへの失望の声もある[69]。そして，報奨金の有無は，単に金銭的負担軽減の問題を超えて，選手のやる気の問題という精神的影響ともつながっているとの指摘もある[70]。さらには，報奨金の有無の問題を，練習時間の確保などについての配慮の問題と同じ次元でとらえる者もいる[71]。

他方，この問題は，全体的な「成功の報酬」と関連しているとして，デフリンピックの知名度，世間の注目の度合いを高めるといった課題も含めた広い次元で考えるべきとの見方もあることに留意すべきであろう[72]。

5．認知度の問題及び意識改革の必要性

デフリンピックをめぐる多くの問題は，実のところ，デフリンピックの知名度あるいは認知度と関連している。たとえば，公的支援もデフリンピックの社会的認知度と関連しているとの指摘もある[73]。

こうした認知度の低さについては，デフスポーツの認知度の低さに問題があるという面[74]，デフリンピック大会の認知度，とりわけ教育現場での認知度の問題[75]，国を代表して大会へ出場する意義への認識不足[76]，そしてとりわけ諸外国に比べて我が国の一般社会における認知度の低さの指摘などが目立つ[77]。

最後の点と関連して，なかには，そもそもろう者に対する我が国の社会的関心の低さを問題とする向きもある[78]。このような認知度の低さを克服する方途として選手団報告書に言及されている点としては，たとえば，とにかく選手としてよい成績をあげること[79]，同じ競技で著名な健常者選手の支援をあおぐこと[80]，健常者団体との連携，協力[81]，学校教育現場における PR の強化[82]，定期的なマスコミ対策などが挙げられている[83]。

認知度の問題は，ある意味では一般社会の意識改革の問題であるが，デフリンピック関係者自身の意識改革を訴える声もある。たとえば，コーチやスタッフにボランテイア

精神をもって参加する人たちがいるが，これからは，「障害者スポーツ＝ボランテイア役員という概念を破壊し，新しい役員のスタイルを確立」すべしとする意見もある[84]。このことは，役員，コーチ，スタッフ，など多くのレベルで，業務の明確化，役割の制度化が必要であることを示唆しているといえる[85]。また選手レベルでは，ろう者の選手としてのアイデンティティの強化が望ましいという声もある[86]。

以上をいわば総括するかたちで，意識改革の問題について指摘した次の見解は，広く留意されるべきであろう。

> 私が就任して目標に掲げたのは３つあります。
>
> １つ目は選手の意識改革，２つ目は，ろうあ者協会の意識革命，３つ目は，マスコミ（メディア）対策でした。１つ目の選手の意識改革は，合宿を重ねるごとに強くなりたいという意識が芽生えて自然と苦しい練習にも耐えられるようになりました，若いとかベテランとの区別はなくアスリートとして常に指導しました。月／１回のペースの合宿ですので，終了してから次の合宿までに怠けていれば自ずと練習にはついてこられませんので意外と見ていないところの方が練習量の確保等で工夫をしたと感じています。また，人間として共存の世界で生きていかなければなりません。障害があるからといって同情はありますが，評価はわかりません。如何なる時も健常と障害とかでなく共存の世界に飛び込んでいける人間力を身につけさせて欲しかったのです。ですから合宿の開始時にはいつも約45分間の講義をしてから練習をスタートさせました，内容は今まで自分自身が経験したことをいろいろな角度から説明をして共存の世界で生きるパワーを身につけさせてあげられたと感じています。
>
> ２つ目の日本ろうあ者卓球協会の意識革命です。これは非常に難しい問題でしたが，ここを革命しないといつまで経っても競技においては成功（金メダル）することはないと感じました。デフリンピックはここで終わりますが必ず４年後にはまたデフリンピックが開催され，競技が行われるのです，そのためにもしっかりとした健常の組織団体，障害の組織団体の枠を超えた考え方のできる組織を確立することが大切と考え，今までは OK だったものも共存の世界では通用しないものはバッサバッサと切り捨てました。その結果他の競技団体から少しは評価される団体になってきたと思います。今後は，縦横の連携を密にして他の競技団体からモデルになるような組織になることを目指したいと思います[87]。

6．一般社会との関係で考えるべき問題

選手団報告書における感想や意見のなかには，ろう者の大会参加促進や成績向上のための課題といった次元をこえて，ろう者一般の社会における待遇等，デフリンピック大会を越えた次元での指摘もみられる。

そうした指摘の一つは，ろう者のスポーツ活動の意義そのものについての（ろう者自身を含む）社会の理解不足の問題である。この点について，バレーボール競技の監督の一人は，自身の体験に基づいて次のように記している。

> 自分の想像以上に，日本代表へのリスペクトは驚くほどなく，希望する者も圧倒的に少なく，誇りも感じていないため，そこまでしてやりたくないという意見も少なくなかったことはショックでした。情報をもとに積極的に聴覚支援学校への訪問や指導も行いました。協力的な学校や保護者の方も多く，勇気づけられましたが，大多数の学校現場のデフリンビックへの理解度の低さや，スポーツ指導のレベルの差，はっきり言って協力的とは言えない態度や温度差には大きな壁を感じたのも事実です。それは教育現場だけでなく，保護者も同様で，何回も訪問してお願いを重ねるなど，日本代表への配慮や理解を促したのですが適わず，その後も失望させられ続けました。この辺りも今後へ向けての大きな課題です[88]。

他方，本来，ろう者が主体となって運営されるべきデフリンピックが世間の関心を集め，大規模となり充実すればするほど，その活動への健常者の関与が増えるのは必定であるとして，それをどのように考えるべきかという次のような問題提起もある。

> サムスンデフリンピック全体を見れば素晴らしかったと思いますが，ろう者主催のはずなのにトルコの政治家が目立ったことがあり，疑問が残りました。デフリンピックというイベントが巨大化すればろう者だけでは限界がありますし，政治家の力を使わなければ開催は不可能でしょう。日本でも同様と言えるかもしれません。

このことは，源を質せば「デフリンピックス運動は，ろう者によって主導されており，健常者によって主導されている障害者スポーツ組織よりも，認知，支持，財源が得られ

にくい」ということをどう考えるかという問題であるともいえる[89]。

また，デフリンピックにも一般社会の問題が反映されているとして，男女差別（ユニフォームの支給をめぐるもの）に関する指摘もあった[90]。あるいはまた，やや軽々な競技成績目標の立て方が，不当なプレッシャーを与えることになりかねないとする，オリンピックなどでも問題となっている事柄が，デフリンピックにおいても起こりつつあることをうかがわせるような例もある。一つのケース（バレーボール）では，「アジア大会が開催されず，国際試合もままならず，いきなりベスト４という命題をつきつけられた」として，「現場への冒涜」という声が挙がったほどである[91]。

いずれにしても，デフリンピックは，「ろう者によるろう者のための」大会から少しずつ脱皮しつつあるとも，あるいはまた，ろう文化の表現の一形態から、高度なスポーツ活動へと変化しつつあるとも言えよう[92]。

参考引用文献

1　財団法人日本障害者スポーツ協会・財団法人全日本ろうあ連盟『第21回夏季デフリンピック日本選手団参加報告書』2010年（以下『第21回夏季デフリンピック報告書』），p.59.
2　同上，p.83.
3　一般財団法人全日本ろうあ連盟『第22回夏季デフリンピック競技大会　日本選手団参加報告書』2014年（以下『第22回夏季デフリンピック報告書』），p.45.
4　同上，p.48.
5　同上，p.58.
6　同上，p.105.
7　東京都オリンピック・パラリンピック準備局『令和３年度　国際的な障害者スポーツ大会に係る調査結果』2022年．＜https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/seisaku/details/pdf/sportsgames_survey-04.pdf＞，p.38
8　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.64,106.
9　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.59；一般財団法人全日本ろうあ連盟『第23回夏季デフリンピック競技大会　日本選手団参加報告書』2018年（以下『第23回夏季デフリンピック報告書』），p.77.
10　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.112.
11　同上，p.117,120.
12　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.52,『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.47；『第23回夏季デフリンピック報告書』），p.52.
13　『第23回夏季デフリンピック報告書』），p.89.
14　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.68.78.
15　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.104,『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.89,『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.77.
16　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.109.
17　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.126,『第23回夏季デフリンピック報告書』），p.101.
18　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.140,『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.119.
19　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.25,39.
20　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.100.

21　聴覚に困難を有する者を表す用語は複数あり，スポーツ大会や団体の名称においても，「全国ろうあ者体育大会」「アジア太平洋ろう者競技大会」「一般社団法人日本デフ陸上競技協会」というように，異なる用語が用いられている。本稿では，依拠したデフリンピック報告書において選手当事者によって最も多く使われていた「ろう者」で統一した。ただし，固有名詞に関してはこの限りではない。
22　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.65-66.
23　たとえば，バドミントンについては以下を参照。『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.66.
24　たとえば，『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.31,55.
25　『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.45.
26　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.62.
27　筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』2009年，
＜https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/resources/tsukuba-report.pdf＞p.27.
28　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.39.
29　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.82,122，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.108；『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.93.
30　『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.115.
31　同上，p.23-95.
32　同上，p.67.
33　同上，p.83.
34　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.117.
35　同上 p.117,123.
36　『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.45.
37　東京都オリンピック・パラリンピック準備局『令和３年度　国際的な障害者スポーツ大会に係る調査結果』，p.40.
38　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.131，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.78，『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.46,58,68.
39　公益団法人日本障がい者スポーツ協会・一般財団法人全日本ろうあ連盟『第18回冬季デフリンピック競技大会　日本選手団参加報告書』2015年（以下『第18回冬季デフリンピック報告書』），p.34,48.
40　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.134.
41　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.52-53,66,73,81,90,133，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.54,63,113.
42　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.43-44.
43　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.60.
44　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.114.
45　『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.95；『第22回夏季デフリンピック報告書』p.64-65,86,119，『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.59,108.
46　たとえば，『第18回冬季デフリンピック報告書』，p.34,40,44,48.
47　『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.114.
48　たとえば，『第18回冬季デフリンピック報告書』，p.43.
49　たとえば，『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.39.
50　たとえば，『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.122.
51　たとえば，同上，p.61.
52　たとえば，同上，p.86.

53 たとえば，同上，p.67.
54 たとえば，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.107.
55 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』，p.23.
56 たとえば，『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.107,134，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.44,52,78,125，『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.73.
57 『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.103，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.53.
58 『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.42.
59 同上，p.81.
60 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』，p.25-26.
61 『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.49.
62 同上，p.69.
63 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.42.
64 『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.48.
65 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.106.
66 同上，p.102.
67 たとえば，『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.120.
68 『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.45.
69 たとえば，『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.31.
70 たとえば，『第22回夏季デフリンピック報告書』，p.26.
71 たとえば，『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.31.
72 たとえば，『第18回冬季デフリンピック報告書』，p.28.
73 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.23.
74 たとえば，デフバスケットボール，デフバレー，デフアルペンスキーについてこうした指摘が見られる。『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.67，『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.104，公益財団法人日本障がい者スポーツ協会・一般財団法人全日本ろうあ連盟『第19回冬季デフリンピック競技大会　日本選手団参加報告書』2020年（以下『第19回冬季デフリンピック報告書』，p.33.
75 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.102.
76 同上，p.103.
77 同上，p.106.
78 『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.67.
79 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.51,117.
80 『第19回冬季デフリンピック報告書』，p.11.
81 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.106.
82 同上，p.107.
83 『第21回夏季デフリンピック報告書』，p.119.
84 同上，p.82.
85 同上，p.83.
86 同上，p.95.
87 同上，p.119.
88 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.102.
89 Harrison, R. Stuart, *Same Spirit-Different Team: The Politicisation of the Deaflympics*. (Action Deafness Books, 2014), p.312.

90 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.109.
91 『第23回夏季デフリンピック報告書』，p.103.
92 この点に関連し，デフリンピックスがパラリンピック運動からが袂を分かった経緯に関して Harrison は，"Deaf culture before sport" という形で表現している。Harrison, *Same Spirit-Different Team*, p.73.

【Research Note】Issues Surrounding the Deaflympics

OGOURA Kazuo

This research note, based on “Report of the Japan Team” who have participated in recent Deaflympic Games, explores the problems and issues that have been identified by athletes, coaches, staff members as well as sign language interpreters.

The results of the analysis revealed that the low level of awareness of the Deaflympics in Japanese society and the problem of communication among the relevant parties are key issues.

As the Deaflympic Games grow in size and the social attention rises, to what extent the Games can be operated primarily by deaf people themselves could be another important agenda in the future.